

- ① 松本文三郎『牟子理惑論述作年代考』（仏教史雑考所収）。
 ② 福井康順『牟子の研究』（道教の基礎的研究所収）。
 ③ 塚本善隆『中国仏教通史』第一巻第二章第五章。

Saccasankhepa (rūpavibhāgo) の認識論の解明について

勝 木 太 一

1

巴利九註の一書である Sacca Sankhepa は約十二世紀に Cūla Dhammapala より著わされたものである。この書の位置づけは覚音以後の教学の展開をみるのに重要であるにもかかわらず筆者の知るかぎり十分に研究をされたものを見ない。ここでこの書を取りあげるのに、まず九註の分類をあげてみよう。

- (一) 清浄道論の内容をテーマ別に、簡明に示したもの。
 Nāmarūpasamāsa, Nāmarūpapariccheda Saccasankhepa, rūpavibhāgo, Paramattavinicchaya
 (二) アビダルマ綱要書及び入門書としてのもの。
 Abhidhammāvatāra, Abhidhammatthasaṅgaha (及び Nāmarūpapariccheda)
 (三) アッタカター等の総括的ガイダンスとしてのもの。
 Mohavichedani

これらのほとんどは偈文による簡潔な文を特徴としており、その暗唱・口承に便利のように書かれている。そして Saccasankhepa は清浄道論の哲学を細にわたるカテゴリー分類及び定義を下すという立場で著わされており、色の規定・名の定義、色と名により定立された認識対象の把握の問題・真理の認識の問題というように(1)色分別(2)受等の蘊の分別(3)心転起分別(4)雑分別(5)涅槃分別の五品に分けられている。この内容は主として、覚音によって体系づけられた認識論を名色の結合によって展開した Nāmarūpasamāsa や Nāmarūpapariccheda の一つの延長線上にあり、認識の究極を Sacca に志向し、Nibbana と結びついているとしようものである。この Sacca-sankhepa の有す意義は一口に言えば名本説にもとづく、対象の指定作用を中心として認識論を涅槃に結びつけるという九註の体系の内の認識論の完成にあるといつてよ

いのである。

2

Saccasankhepa は色の分類・定義として非常に明解な分類をあげている。この色を認識論的に考察するには五門作用と意門作用を考えねばならない。五門作用とは眼根・身根とその対象である五境との関係であり、意門作用とは五門所縁を判断する作用である。それらは全て心相続に一貫してなされるものであり、いうまでもなくこの意識の所縁は法で、その法に摂せられている内容が「六内処、三相、三非色蘊、十五細色、涅槃、施設」^①とされている。この十五細色について Saccasankhepa では色相続と色積集を生色として十四に摂している。これらが五門によって認識された意門の所縁になる。そのときただちに色法は実体でなく、概念として名に摂せられている。これはまた有名な「有分動揺→引転→前五識→領受→推度→確定→速行→彼所縁」と各心作用に結びつき統合されるものである。このような vihi(認識過程)に対し、色法は同じ色である眼等の浄色(根色)とどのように結びつき認識過程に入るのかは非常に重要な問題である。このことは、既に「如何にして不可見有対の眼により、可見有対の色を見るのか……この色が眼処である」^②とアッタサーリニーにあり、さらに境の色が眼浄を刺激するからその様相が明確になるとする。このような色の認識過程の作用は名によって措定されたものでなくては、その色の存立の定立性が確保されない。このことは Saccasankhepa (10)に「眼等は見んとすること等で光線の業生である……」とされている。ここにいる業生の定義は認識主体者の色措定と考えてよく、その色が vihi に作用するものである。これは清浄道論の業生色の六区分の業縁に相当するものである。このように色が色を措定するという構造は清浄道論にもそのいとぐちを見いだせるものであるが Saccasankhepa に於て名本説として一応の完成をみることになる。

ここで色を明確にするために色法分別をあげることとする。まず Saccasankhepa 特有の分類は

- (一) 生 時節生(尿・糞・胃物・胆汁) 純八法×四
 業生(火界) 命九法×一
 心生(出入息) 声九法×一

計五十色

- (二) 生 心・時節生(汗・涕・唾・涙) 純八法×四
 計六十四色

- (四) 生 身至念の三十二部分中の二十四部分

(心・時・食生)の三が純八法
(業生)身態十法(性十法)

の八法×三と十法×二の四十四色が各二十四部分にある 四十四×二十四

計一〇五六色

(三火界)九十九色

(五風界)一六五色 各々三つの純八法と命九法または声九法

さらに眼・耳・鼻・舌・身・基各十法の六十色で総計一四九四色
これに語表十法を加えて

一五〇四色

となり、これは Saccaśākhēpa (18)~(22) の内容をまとめたものである。これを Abhidhammathasāṅgaha や清浄道論の分類に比較してみると、vithi に摂せられる色のいろあいを濃くしている。清浄道論の色分別は認識対象の存立形式によって、それは Abhidhammathasāṅgaha にも受けつがれている。しかし Abhidhammathasāṅgaha では清浄道論の色分別と Saccaśākhēpa の色分別の複合した形で分別されており、その意図が認識過程の色と、対象としての色の存立形式を一律に色としたといえる。そこで Saccaśākhēpa の色分別の意図を明確にいうと、それは色の認識過程との関係を示すものといえよう。「内なる眼等の五〔蘊〕こそ浄〔色〕であり、基は基〔色〕と門は表〔色〕と共に……」「残りの二十・二十一・二十二は外なるものであり、非浄〔色〕・非基〔色〕・非門〔色〕と次第の如し」とのべられておりこの二十・二十一・二十二は二十七色中の五浄を、五浄と基を、五浄と二表をのぞいた色数のことである。これらの浄・非浄・門・非門・基・非基の色と根・非根・不簡別・簡別とは意義のちがったものである。前者群は認識に於ける色についてのべたものであるが、後者群は認識対象の存在を規定する色のカテゴリである。それ故、根・不簡別は業生として規定されている。そのことに対し Saccaśākhēpa には業生に命九法(純八法と命根)及び眼耳鼻舌身男女基各十法(命九法に各根)を規定しており、また Abhidhammathasāṅgaha には「心〔色〕根色〔の九〕は業生のみなり。二表は心生のみなり、声は心・時節生なり。三性は時節・心・食生なり、八種の不簡別色と虚空界とは四によって生ず」と同じことがのべられているのである。

3

このように Saccaśākhēpa の色分別の特徴を知ると、その思想の底流に色↓識という単純な認識過程におさまらないというものがあることを明らかにしえる。実は五門作用にのみ依っている認識は、色の存立を問題とはしない素朴な実在論的カテゴリ

にある。この色の存立の根拠を明確にしえない弱点は有分心の十六回の生滅相続による心転起によってのみ色↓識という径路を考えるのに不十分なことである。清浄道論では前生の基にもとづいて心等起色の生成があるとされており、Abhidhammathasāṅgaha には「結生時には……業等起象が得られ、転起に於ては心・時節等四色が得られる。次に無想有情には眼耳鼻舌も得られず。また一切の心生色も得られず。故にそれらの結生時には命九法のみある」とあり、これら結びつけて考えると、業等起色の結生にもとづいて基を所依として、次に心等起色を転起されると言える。Saccaśākhēpa はこの点を最も明確にかつ論理的に発展させているのである。前記の色分別の表に加えられている語表十法の提唱によってこの問題を処理することに成功している。というのは、表を主体的心作用によるという考えを入れたと、心等起色についての表の指定作用を考えていたといえるからだ。少なくとも清浄道論よりも後代になると語表(Vaci vinnatti)には「語音により意志を表わす」ことよりも「牛の頭骨などの水の表識を見ると、こゝに水ありと知る」という如き概念としての意義が強められてくるのである。このような語表は認識対象としての色の存立を前提とした業生色の滅後に、それを所縁として心生色の転起があることを可能にし、これが名本説の概念による対象の指定の径路となるのである。その概念自体が「語表十法」として色として把握されているのである。これをまとめると、或る認識の成立を一つの契機として概念の形成をうながし、その概念によって以後の認識を規定するということになる。

4

紙数の都合上、かなりの部分について解説を省略して、語表十法の提唱の証明に始したが、ここにとりあげた Saccaśākhēpa の rūpavhāga の一部でも清浄道論に見いだせた「名本説」の概念がどのようなものか、如何に完成したかを知る上で重要であることがわかるであらう。Nāmarūpapariccheda, Nāmarūpasamāsa, Saccaśākhēpa のつながりの上で、心と名の結びつきにその認識論の完成を知ることができたが、ここでのべたその中心の一つが名の色の指定作用の説であることはいくらかでも証明することができたと思う。

〔A表〕へカッコ内数字は偈のナンバー

眼・耳・鼻・舌・身の五浄色↓光線等の業生(10)

声・香・味・(光)↓五浄の対象(10)

四大種↓堅性・熱性等(7)

食 素↓生活・男女性の因(11)

男・女 根↓身体に遍満し作用する(11)

- 基 命 根→二界の業生(意界・意識界)(12)
 空 根→水蓮の水の如し(12)
 生 ↓色の区別(13)
 輕快性→不遲鈍性(14)
 柔軟性→不堅固性(14)
 適業性→身業の隨順性(14)
 身 表→心生の風大の變化・色柱は根拠(15)
 語 表→心による地大の變化(16)
 老 (該當偈ナシ)

このA表は Saccasankhepa の最初にみられる色分別でこれは清淨道論 pp. 448~9 を継承したものの略解は Saccasankhepa の偈の内容による。

- 註① Attasīlī (Asl) p. 66, Abhidhammathasāṅgaha (Abhs) p. 13
 ② Asl. p. 249 (31)
 ③ Visuddhimagga (vism) p. 614
 ④ Vism. p. 450~, Abhs. p. 28~, Abhs. p. 29, A(table)
 ⑤ Saccasankhepa (18)
 ⑥ ibid (19)
 ⑦ A(table)
 ⑧ Abhs. p. 28
 ⑨ Vism. p. 615
 ⑩ Abhs. p. 30
 ⑪ Vism. p. 448

発智・大毘婆沙論における

世第一法説の一考察

榊 田 善 夫

発智論に於ける項目の中には、諸部派間に於いて見解を種々異にしたものを引用していることは、それに続く註釈書大毘婆沙論から知られる。此等の異なる見解を考察することは、発智論を取り巻く時代の思想状況を説明することになるだけでなく、後

代での大毘婆沙論の教学的役割を探ることに有益な示唆を与えてくれるものと考えられる。本稿は、それ等の中で世第一法説とそれを巡る問題を課題として採び、有部阿毘達磨思想史開明の指針の一つにしようとするものである。

説一切有部は、修行道の体系を先ず順解脱分の五停心・別相念住・総相念住の三賢、順決択分の煖・頂・忍・世第一法の四善根、そして見道・修道の預流・一來・不還・阿羅漢向の有学道、阿羅漢果の無学道へと修道位を展開させるのであるが、今問題とする世第一法 (laukika-āgra-dharma) は、正性離生 (samyaktva-niyama) と言われ、有漏なる異生位から無漏なる聖位に入る世界超越に於ける人間存在の最終的場面である。それについて諸部派間に種々異なる見解の交わっているのが見られる。

発智論は、次の一文中に異説を出す。

①云何世第一法。答若心所法。為等無間。入正性離生。是謂世第一法。有作是説。若五根為等無間。入正性離生。是謂世第一法。」

註釈書なる大毘婆沙論に於いては、この異説を舊阿毘達磨論者の説とする。付加された理由として、分別論者の以下の見解を破る為に説かれたと説明している。

「謂分別論者執三信等五根唯は無漏。一切異生悉不成就。」

先の異説の舊阿毘達磨論者説が、

「為遮彼(分別論者)意。故舊阿毘達磨者説。世第一法以五根為自性。世第一法在異生身。故知五根亦通有漏異生。」

として分別論者と対立していたことが、この内容から伺うことができる。

この分別論者の説については、異部宗輪論中の説一切有部が「世間信根有り」とするのに対立した大眾部・化地部の「世間信根無し」に同ずるものと解釈できるが、発智論の異説、つまり大毘婆沙論中の舊阿毘達磨論者の説に相当するものとして経部と犢子部の説を大毘婆沙論から挙げることができる。

②或説。此是經部所説。謂經部師。亦為遮遣分別論者。如前所執。故作是言。世第一法五根為自性。非唯爾所。」

③有説。此是犢子部宗。彼部師執世第一法信等五根以為自性。唯此五根是自性善。余雜此故。亦得善名。由此五根建立一切賢聖差別。不由餘根。」

この二説は、分別論者との經典理解の相違から対立した見解となったことが大毘婆沙論から読みとれる。

又、旧訳毘婆沙論を補ってみると分別論者と応理論者の対立が大毘婆沙論で明確になるが、分別論者が、

④「分別論者作如是言。此中根名説三所依處。不説根體。於我何違。」とするのに対して、応理論者が、